



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2815号 2016.1.15 発行

脳出血まひ、回復の「道」判明 リハビリ積むと代替神経 朝日新聞 2016年1月14日



脳出血によるまひが、リハビリで改善するメカニズムを、生理学研究所（愛知県岡崎市）と名古屋市立大学の研究チームが動物実験で明らかにした。傷ついた神経に代わり別の神経が新たな経路を作っていた。研究成果は13日付の米科学誌に掲載された。

大脳の運動野からの命令は神経回路で脊髄（せきずい）を經由し手足に伝わる。この神経回路が脳出血で遮断されると、まひが生じる。研究チームはラットで実験。まひした前脚を強制的に使わせるリハビリを1週間した結果、脳の運動野から、脳幹の「赤核」と呼ばれる場所へ神経が複数伸びていることが確認された。

まひした前脚で台に載せたえさを取れるか実験したところ、成功率はリハビリをしないと19%。リハビリをしたラットでは48%になったが、赤核を通るルートを遮断すると18%まで下がった。このことから、脳が赤核へのバイパスを作ることによって神経回路を補強したと考えられるという。

研究チームの生理研・伊佐正教授は「より効率的なリハビリ法につながる成果だ。電気刺激などで直接この経路を活性化する方法も開発できるかもしれない」と話す。（月舘彩子）

障害者スポーツ観戦「経験ある」都民2% 学校・企業…足運んで生で見て



産経新聞 2016年1月13日
ボート競技の体験に挑戦する増田汐里さん=東京都北区（石元悠生撮影）

2020年東京パラリンピックで活躍する選手を発掘しようと、東京都は11日、競技を体験できるイベントを都内で開き、211人が参加した。催しは盛況だったが、都の調査では障害者スポーツを実際に観戦した都民はわずか2%にとどまる。緒についてきた「パラリンピック」という言葉が上滑りせぬよう、五輪後の社会の在り方を見据えた取り組みが急がれる。

「障害があって体育の授業を見学している生徒はいませんか」。選手の発掘事業を前に、都幹部は公立や私立の学校関係者にこう呼びかけた。障害者の3割が「条件を整えばスポーツをしたい」との意向を持ち、特別支援学校だけでなく、一般校に通う障害者に参加を促した。障害者スポーツの理解に教育現場の協力を得る狙いもあった。

当初は100人を見込んでいたが、253人の応募があった。東京都江東区の豊洲北小6年、増田汐里（しおり）さん（12）もその1人。先天性二分脊椎症で下半身に障害を

持つ。水泳、バドミントンなどを体験し、「将来はパラリンピアンになりたい」と夢を語ってくれた。

大会に向けて政府や都は「最高の大会を目指す」と意気込むが、障害者スポーツを取り巻く環境は厳しい。人手も資金も不足する競技団体がほとんどで「バリアフリーの練習場の予約は2年前から必要」（競技関係者）というほどだ。

都では選手を取り上げたテレビ番組の放映などの普及に来年度予算案で10億円を盛り込む。また、200億円の基金を創設して支援に乗り出すが、具体的な枠組み作りはこれからだ。

文科省の有識者会議は普及に向け、授業での車いすラグビーなどの体験や、教員が障害者スポーツ指導員の資格を取得することも有効と指摘した。学校の授業や企業活動の中に「観戦」も取り入れることはできないか。今からできることを考えていきたい。（社会部編集委員 石元悠生）

奈良) 思い思いはじける個性 県障害者芸術祭、開催へ 栗田優美

朝日新聞 2016年1月14日

できあがった作品を一人ひとり発表した=奈良市の奈良東養護学校



県障害者芸術祭「HAPPY SPOT NARA」が、30日から2月7日まで奈良市で開かれる。

この関連でアーティストが学校を訪ね、子供たちと制作に取り組む企画が、4年前から続いている。「日常生活空間で非日常のアートに触れ、表現する機会に」という思いを込めて。



13日、奈良市の県立奈良東養護学校。「パッチさん」こと村上史博さん（37）がやってきた。スーツケースから出てきたのは、色とりどりの布。三角形の旗を連ねた「ガーランド」を広げると、生徒たちから歓声が上がった。

中学部の2年生12人が、パッチさんとともにガーランドづくりに挑んだ。ひし形の型紙を使って布を裁ち、のり付きのフェルトで文字やマークをつければできあがり。手順を教わると、さっそく布選びにとりかかった。

服飾デザイナー・鶴丸さん 竹田で新たな挑戦へ 大分合同新聞 2016年1月14日

高齢者や体にハンディがある人でも着ることができる服作りに取り組む、大分市の服飾デザイナー鶴丸礼子さん（59）が13日、竹田市に新たな拠点を設ける方針を発表した。鶴丸さんが代表を務める一般社団法人「服は着る薬」が4月から同市の遊休施設を借り受けて技術者を育成したり、衣服が人体に及ぼす影響を調べる場所として整備する。

鶴丸さんは大分市府内町にアトリエ兼店舗を構え、一人一人の体形や注文に合わせたオーダーメイドの服を製作している。体にフィットした正確な服が出来上がる「鶴丸式製図法」を考案し、衣服の悩みを抱える人の要望に応えている。

活動の幅を広げようと、昨年2月に一般社団法人「服は着る薬」を設立。障害者と健常者が同じ舞台に立つファッションショーを企画したり、後継者の育成に当たるなど、体形に合った服の重要性を伝える活動に力を入れている。



竹田市に新たな拠点が整備されることで、雇用の創出や地域のにぎわいづくりが期待される。大学や病院と連携して「衣服が与える人体への影響」をテーマに調査研究する構想もある。

新たな拠点を整備することを表明した鶴丸礼子代表＝13日、竹田市役所

市役所で13日、進出表明式があり、鶴丸さんら事業に協力するスタッフが出席。首藤勝次市長が「竹田市は地方創生の一環として温泉を活用した予防医療を促進している。衣服の観点から健康づくりを考える鶴丸さんの理念に共感した。全国や世界から注目されるプロジェクトとして後押ししたい」とあいさつした。

鶴丸さんは「特殊な形状をした衣服の購入が保険適用の対象になったり、服を作るスキルが国家資格になるのが最終目標。多くの高齢者や障害者に『着る喜び』を感じてもらえるよう、竹田市で新たな取り組みに挑戦したい」と話した。

認知症高齢者や障害者 ステッカーで守る 危険な徘徊を見たら一報を

東京新聞 2016年1月14日

個人情報登録番号が記載されたステッカー

厚木市は、徘徊（はいかい）する恐れのある認知症高齢者や若年性認知症、障害のある人などの個人情報登録番号が記載されたステッカーを希望者に配布するサービスを始めた。外出時に靴や持ち物に貼ることで、発見時に個人を特定しやすくする。市はステッカーの存在を広く周知し、市民全体で見守り活動を進めていきたいとしている。

（寺岡秀樹）

このサービスは希望者が、利用する個人の住所や連絡先、認知症の程度、身体的特徴、写真などを市に事前登録することが必要。その後、登録番号が記載された反射材を使ったステッカーが一人十枚、無料で配布される。登録情報は市と警察が管理し、保護した際に個人を特定しやすくなっている。現在、希望者を募っており、今月末から配布する予定。

取り組みを進めている市健康長寿課は「ステッカーを貼った人が一人でいたり、道端に座り込んでいたり、赤信号で横断していたりするなど、危険な行動をする高齢者などを見かけたら、積極的に声を掛け、市に一報をいただきたい」と呼び掛けている。ステッカーについて自治会や市のホームページ（HP）、広報を通じて市民に広く周知していく。市の要介護・要支援認定者は昨年十二月末現在で約六千七百人。うち約四千人が認知症傾向にあるという。

市は徘徊から高齢者を守るため、「市認知症高齢者等徘徊SOSネットワークシステム運営事業」を二〇〇〇年から開始。事前に登録された個人情報を市と警察が共有し、関係機関とも協力しながら早期発見に取り組んでいる。ステッカーをもらうための登録はこのシステムを利用し、現在百七人が登録している。

〇二年からは登録者のうち希望者に対し、衛星利用測位システム（GPS）端末機を貸与。二十四時間体制で位置を検索でき、警備会社が現場に急行するサービスも提供する。現在九人が登録し、本年度は昨年十一月現在で六十五件の検索実績があったという。

問い合わせは、市健康長寿課＝電046（225）2220＝へ。



【茨城】14年度の県内障害者虐待状況 相談・通報92件、34人を被害認定

東京新聞 2016年1月14日

県は、二〇一四年度に県内で発生した障害者に対する虐待の状況をまとめ、公表した。県や市町村に寄せられた相談や通報は計九十二件で、このうち三十四人の虐待を認定した。

三十四人のうち、三十一人が親など養護者から虐待を受けていた。

福祉施設の認定は、知的障害者に対し、世話人や生活支援員が暴力を振るったり、暴言を浴びせるなど身体的、心理的虐待を加えたケース。いずれも県が改善を勧告している。雇用先での虐待認定はなかった。

一三年度と比べ、通報や相談が七件、認定が十二件、それぞれ増加している。県障害福祉課は「引き続き市町村の職員や障害者福祉施設の施設長らを対象にした研修を実施して、虐待防止を図っていきたい」としている。（酒井健）

補正予算案が衆院通過へ＝与党、20日成立の意向 時事通信 2016年1月13日

一般会計総額3兆3213億円の2015年度補正予算案は14日午後の衆院本会議で採決され、与党などの賛成多数で可決、参院に送付される。参院予算委員会では15、18両日に基本的質疑を行うことで与野党が合意済み。与党は20日に成立させたい意向だ。

採決では、安倍政権に是々非々で臨む姿勢を示しているおおさか維新の会や、改革結集の会も反対する。

補正予算案には、低所得高齢者に1人当たり3万円を支給する臨時給付金を含む「1億総活躍社会」の実現へ向けた緊急施策をはじめ、環太平洋連携協定（TPP）の大筋合意を受けた国内農業対策などが盛り込まれた。

衆院予算委の審議では、臨時給付金や来年4月の消費税増税時に導入される軽減税率の財源などをめぐり論戦が交わされた。野党側は参院審議でも、これらの論点を引き続き追及する方針だ。

母乳育児推進の問題点——粉ミルクは本当に悪いのか！？

森戸やすみ / 小児科専門医 シノドスジャーナル 2016年1月14日

近年、粉ミルクがよいとされた昔とは反対に母乳育児推進が主流となり、「母乳は素晴らしい」「粉ミルクはよくない」という情報があふれています。

確かに母乳はよいものです。しかし、母乳は出にくい人もいれば、なんらかの事情であげられない人もいます。それなのに母乳に関する書籍やブログなどのほとんどは、母乳を過大評価する一方で、粉ミルクにはふれぬか欠点だけを並べ立てるのみ。公平な視点に欠けています。これでは当然、「赤ちゃんに最良のことをしてあげたい」と考えるお母さんは、心身ともにバランスを崩しやすい時期であることも手伝って追い詰められがちでしょう。

実際、母乳を過大評価する医療従事者（主に助産師）や周囲の人に「母乳じゃない」という価値観を押し付けられ、つらい思いをするお母さんはとても多いようです。2015年7月には、安全性が確保されていない母乳がインターネット上で売られていたことが報道されて話題になりました。安全性が担保されていない母乳を手に入れようとするほど、思い詰めるお母さんもいるのです。

このような状況に、私は以前から問題を感じていました。そこで2015年11月25日、兼ねてから母乳育児推進の問題点について共に話し合ってきた産婦人科医の宋美玄先生、担当編集とともに『母乳でも粉ミルクでも混合でも！産婦人科医ママと小児科医ママのらくちん授乳BOOK』という本を出したばかりです。これは授乳中の方、また医療者向けの実用的な本ですが、今回は母乳育児推進の問題点について書いていきたいと思えます。

粉ミルクから母乳へ

日本初の粉ミルクは大正5（1917）年に発売され、徐々に一般の人たちに普及しました。

粉ミルクが開発される前、母乳の出ないお母さんたちは大変苦勞したはずで、他人からもらい乳をするとか、コンデンスミルクや牛乳を薄めたもの、重湯や米のとぎ汁といったものを与えるしかなかったという記録が残っています。子どもに必要な栄養を与えられる粉ミルクの登場は、とても喜ばしいものだったでしょう。

団塊の世代がベビーブームに突入した 1970 年代に粉ミルクの消費量はピークを迎え、母乳栄養の比率が低下して、混合栄養や粉ミルク栄養の比率が増加しました。「粉ミルクを赤ちゃんに与えるのは、母乳育児よりも先進的かつ合理的で、栄養面からも好ましい」と考える人も多かったようです。

ところが実際はそうではなく、母乳には粉ミルクにない利点が多くあります。母乳には免疫グロブリン、サイトカイン、成長因子といったさまざまな成分が含まれているため、免疫機能が未熟な赤ちゃんにとって感染症予防に役立つのです。衛生状態、栄養状態のよくない発展途上国だけでなく、先進国の中産階級においても約 3 倍も入院のリスクが下がることがわかっています（※1）。また、母乳は赤ちゃんの消化吸収能力や腎機能に最も適していることも確かです。

（※1） Jay Moreland, M.D., and Jenifer Coombs, P.A.-C., Am Fam Physician. 2000 Apr 1;61(7):2093-2100.

さらに母乳育児は、母親側にもメリットがあり、子宮の回復や体重減少を助け、月経の再開を遅らせます。

そこで、WHO とユニセフは 1989 年に、「母乳育児成功のための 10 か条」という共同声明を発表しました。以降、世界的に母乳育児を推進する世論が高まり、日本でも医師、助産師、栄養士を中心に母乳育児に対する指導が加熱しています。その一方で、母乳育児推進には問題点も見られるようになってきました。

問題点 1 専門家が少なくデマが多いこと

まず、正しい情報を伝える専門家が少ないため、母乳に関してはさまざまな都市伝説や迷信が広まっています。

例えば、「質の悪い母乳や粉ミルクを飲むと、赤ちゃんの髪が逆立つ」、「粉ミルクだと必ずアレルギーや発達障害になる」などは根拠のないデマです。

そのほか、母がとった食事と乳腺炎には関連性がないという研究結果（※2）があるにもかかわらず「乳製品や脂肪分の多い食事をとると乳腺炎になるから、和の粗食にするべき」という迷信が当然のこととして広まっています。

（※2） ABM 臨床プロトコル第 4 号乳腺炎（2014 年改訂版） ABM Protocol Committee

「ファストフードを食べると、母乳がしょっぱくなる」などという、母乳の味についての説を耳にしたことがある人も多いでしょう。しかし、母乳中の乳糖とナトリウムの濃度は、母の食事に関係なく一定なのでデマです。「母の食事が悪いと、乳児湿疹が出る」などという人もいますが、乳児湿疹は子ども自身のホルモンが原因で、スキンケアが適切でないと悪化するものの、やはり母の食事とは関係ありません。

そのほか「母乳を与えている間は、薬を一切とってはいけない」という説もありますが、これも間違い。授乳中でも飲むことができる薬は、たくさんあります。

これらのデマを広めているのは、一般の人だけではありません。知識をアップデートしていない助産師や保健師、医師が広めていることが多々あります。ときにそういうデマ情報を伝える医療関係者は、母親に対して「母乳がまずいから赤ちゃんが飲まないんだ」などと高圧的であったり、「母親なら努力しないと」などと母を怠惰だと決めつけたりして、罪悪感を与えて追い詰めることもあるようです。

問題点 2 情報提供が偏っていること

もう一つは、たとえ医学的に大きくは間違っていないとしても、母乳と粉ミルクに関する情報提供の仕方が偏っていることが挙げられます。

母乳育児を勧める側は、母乳のメリットを大げさに伝えがちです。例えば、「母乳で育てられた子どもは IQ が高くなる」という話を聞いたことがある人は多いでしょう。母乳で育

てられた子どもは成人してから知能レベルが高く高収入であるという研究論文が、イギリスの権威ある医学雑誌『ランセット』に掲載されました（※3）。ブラジルで新生児約 3500 人を 30 年間追跡調査したもので、30 歳の時点で IQ が約 4 ポイント高く、収入は 1 か月あたり約 1 万 3 千円多かったというものです。

（※3）Bernardo Lessa Horta Lancet Glob Health. 2015 Apr;3(4):e199-205. doi: 10.1016/S2214-109X(15)70002-1.

しかし、反論もあります。ロンドン大学の研究で一卵性双生児 11000 人が協力したものです（※4）。母乳育ちと粉ミルク育ちの子に分け、IQ を測定したところ 2 歳の時点で女兒には有意差があったようですが、16 歳には男女ともその差が消失したとのことでした。つまり、現時点で「母乳育児で IQ が高くなる」とするのは不適切でしょう。

（※4）von Stumm S PLoS One. 2015 Sep 25;10(9):e0138676. doi: 10.1371/journal.pone.0138676. eCollection 2015.

一方、粉ミルクについては、デメリットが大げさに伝えられがちです。例えば、「粉ミルクだと感染症になりやすい」と言われます。母乳育児で感染症のリスクが下がるのは確かですが、感染症を防ぐ手立ては母乳だけではありません。現代の日本で、粉ミルクだと病気になる心配しすぎる必要はないでしょう。

また、「粉ミルクで育てると、母子ともに病気になるやすい」ということを言う人がいるのですが、そんな論文はありません。確かに母乳育児をすると、子どもが喘息や肥満、糖尿病や生活習慣病、白血病になりにくい、母親が乳がんや卵巣がん、骨粗しょう症になりやすいというデータはあります（※5）。

（※5）American Academy of Pediatrics Section on Breastfeeding: Breastfeeding and the Use of Human Milk. Pediatrics 2005 Feb; 115(2) p496-506

アメリカ小児科学会がまとめたものですが、元論文をたどると、例えば 1 型糖尿病については「生まれてまもなく粉ミルクを与えられるとリスクが 1.5 倍になる」という内容でした。2 型糖尿病については「この病気が多いピマインディアンにおいて、生後 2 か月の間、完全母乳栄養にするとリスクが下がる」という論文が元になっています。

つまり、これらは信頼できる研究結果ですが、ある何百～何千人という母集団における規定された状況で、あるいは数ある論文のレビューで、完全母乳栄養群、人工栄養群、混合栄養群に分けて比較すると各疾患になる数に統計学的に差が出たということ。母乳栄養でも病気になることはあるけれども、比べてみると人工栄養のほうが統計学的に多かったという意味です。これをもとに脅迫めいた表現で母たちを不安にさせるのは間違っているし、よくないでしょう。

そして、粉ミルクを最も飲んでいた世代、ベビーブーマーが問題なく育っているのは周知の事実です。衛生面で問題のない水が手に入る日本で、現在の知識と技術で可能な限り子どもによい栄養である粉ミルクを使うことを、極端に忌避する必要があるのでしょうか。

問題3 無理な完母にはリスクがあること

実際、出産後スムーズに母乳が出る人ばかりではありません。産後 2～3 日の間に 90%以上の母親で、多かれ少なかれ母乳分泌が開始します。産後 4 日目頃から徐々に分泌量が増加し、2～3 週間後までに安定してくるといわれています。

しかし、母の体調や心理状態、新生児の全身状態、また社会的な事情や支援の多寡はそれぞれ異なります。すべてのお母さんが、必ずしも赤ちゃんが育つに十分な量の母乳が出せるとは限りません。ですから、医療関係者が母乳栄養だけで育てること（完母）を過度に褒め称えたり無理に勧めたり、粉ミルクのリスクを大きく伝えたり、お母さんが「絶対に母乳だけで育てないといけない」と思い込んだりしてしまうと危険な場合があるのです。

じつは「母乳育児成功のための 10 か条」の発表以降、母乳性高ナトリウム血症や低血糖脳症の報告が増えています（※6）。赤ちゃんが母乳の不足から、脱水や高ナトリウム血症になると、播種性血管内凝固症候群、脳浮腫、けいれん、腎不全、頭蓋内出血、血栓塞栓症などの致死性の合併症が起こったり、神経学的後遺症が残ったりすることがあるのです。また、低血糖脳症になると、易刺激性や傾眠、無呼吸発作、低体温などの急性症状が生じ

たり、発達障害や皮質盲などの後遺症が残ったりすることもあります。

(※6) 大橋敦他「日本小児科学会雑誌」2013 117(9)p1478-1482

母乳育児支援は、こういったことが起こらないよう慎重に行うべきものです。完全母乳栄養にするべく努力して感染症や将来の疾患をある程度は予防できたとしても、後遺症が残ってしまうようでは困ります。将来の疾患を防ぐことは、後遺症を残さないことよりも重要でしょうか？

今こそ偏りのない支援を

粉ミルクが流行した時代は過ぎ、母乳の素晴らしさが浸透した今こそ、両者について冷静に評価する時期だと思います。

医療者が母乳の利点を伝えて母乳育児を推奨すること自体はよいのですが、母乳を過大評価・粉ミルクを過小評価することなく、客観的な事実を伝えるべきでしょう。そのためにも、まず助産師・保健師の養成段階で、医学的に根拠のある正しい教育が行われることが大切です。

また医師が安易に母乳または粉ミルクの一方を勧めたり、間違った授乳指導をしたり、授乳中の女性に薬を一切出さなかったり、または薬を飲む場合に不要な断乳を勧めたりすることもあるので、いくら医師は病気の専門家とはいえども産婦人科医や小児科医、内科医は母乳に関する基本的な知識を身に付けるべきだと思います。

先にも述べた通り、お母さんの母乳分泌量には個人差があり、体力も環境も価値観も、それぞれに違うもの。母乳が素晴らしいものだとして理解していたとしても、どこまで頑張るかは人それぞれです。粉ミルクが赤ちゃんにとって危険なものではない以上、価値観の押し付けにならないような配慮も必要でしょう。母乳育児支援は「支援」を求める人に行ってこそ、支援と言えるのではないのでしょうか。

また、お母さんが完全母乳栄養で育てたいと強く願っている場合でも、赤ちゃんが栄養不足や脱水や低血糖にならないよう、ご自身が産後うつや育児ノイローゼ、疲労による体調不良に陥らないことも重要です。母乳育児をがんばろうとした結果、赤ちゃんやお母さんの心身の健康が損なわれては本末転倒だということは、医療関係者はもちろん、お母さんやお父さんも知っておいていただければと思います。

そして、みなさんに何より知っておいていただきたいのは、「科学的な裏付けのない育児の都市伝説や迷信を拡散するのはよくないこと」だということ。特に初めての育児では、まじめなお母さんやお父さんほど「子供のために」と、さまざまな都市伝説や迷信を信じて追い詰められてしまいがちです。根拠のわからない俗説を広めないようにしましょう。

産婦人科医ママと小児科医ママの らくちん授乳 BOOK

著者/訳者：宋美玄 森戸やすみ 出版社：メタモル出版(2015-11-26) 定価：¥ 1,490 Amazon 価格：¥ 1,490 単行本(ソフトカバー) (135 ページ) ISBN-10: 4895958892 ISBN-13: 9784895958899

森戸やすみ(もりと・やすみ) 小児科専門医

小児科専門医。1971年、東京生まれ。NICUなどを経て、現在は小児科に勤務。雑誌やブログ、Twitterなどを通して、主に子供の健康についての啓蒙活動を行っている。単著に『小児科医ママの「育児の不安」解決BOOK』がある。



障害者ら誇り胸に10周年 長野の西洋料理店15日新装開店

信濃毎日新聞 2016年1月14日

15日に新装開店する西洋料理店「もりたろう」。店内では内装などの工事が進む

長野市平林の社会福祉法人「森と木」が運営する西洋料理店「もりたろう」(長野市東町)が15日、内装やメニューの一部を一新して新装開店する。同店は知的障害のあるスタッフが料理の仕込み作業や接客などを担っており、昨年11月に開店10周年を迎えた。障害がある人も誇りを持って働ける場所で



あり続けようと、新たなスタートを切る。

「もりたろう」は2005年、複合商業施設「ばていお大門」の開設とともにオープン。現在、シェフ3人とスタッフ8人が働く。このうち5人に知的障害があり、料理の下ごしらえや店内の清掃に携わっている。

新メニューは、「信州特選ポークフィレカツ定食」「信州福味鶏のハーブグリル定食」など5種。県産食材を使う同店の特色をより前面に出そうと開発した。客の要望を反映し、量を控えた健康志向の料理も増やした。店内は木目調の内装で、温かみのある空間になっている。

「森と木」の岸田隆専務理事（50）は「障害者が働いていることではなく、味で勝負する」と話す。「多くの人に愛される店をつくることで、健常者も障害がある人も、双方が働くことに誇りを持てる」と考えるからだ。

「もりたろう」には、県外の社会福祉施設も視察に訪れるという。岸田さんは「この10年で、『森と木』の考え方が広がってきた」と言い、今後は民間企業と協力するなどし、より多様な働き方ができる運営の在り方を探りたいとしている。

新装開店記念として15日から17日まで、全メニュー（飲み物などを除く）を100円引きで提供する。問い合わせは、もりたろう（電話026・237・3939）へ。

「入り口支援」で再犯ほぼなし 京都地検

京都新聞 2016年1月14日

京都地検が、心身に疾患がある高齢者や知的障害者で主に不起訴（起訴猶予）が想定される被疑者らの処分に関し、福祉支援について社会福祉士の助言を参考にする「入り口支援」が開始1年で25件行われ、ほぼ再犯が確認されていないことが分かった。

本来は福祉支援の対象者なのに社会で制度につながれず孤立を深め、万引きなど比較的軽い犯罪を繰り返す高齢者や障害者は多い。犯罪白書によると、2014年の刑務所に入る高齢者のうち再犯者は7割を超え、12年の法務省調査では、受刑中の知的障害者の入所回数は平均3・8回。

そのため京都地検は被疑者の起訴、不起訴などを決める刑事司法の入り口で、京都社会福祉士会の社会福祉士の意見を聞く取り組みを2014年8月に始めた。被疑者らが社会で適切な福祉支援を受ければ再犯に至らないと判断すれば、社会福祉士との面談を30分設定。社会福祉士は、保護者・支援者や住まい、仕事・生計の面で必要な支援を助言し、検察官はそれを参考に最終的に起訴、不起訴などの処分を決める。

地検によると、14年8月から15年12月に、府北部在住の1人を含む社会福祉士4人が計40件の面談を行った。事案は窃盗が過半数で、ほかには放置自転車の持ち去りや家族への暴行、無賃乗車。このうち15年6月までの25件を追跡調査すると、24件で再犯がなかった。

14年9月に送検された窃盗・傷害の被疑男性（70代）は初期の認知症と診断されていたが、面談した社会福祉士が「症状が進行しており、高齢の妻も夫の介護で疲弊している。介護保険の要支援・要介護認定を申請すべき」と助言。起訴猶予処分となった後に男性は要介護認定され、デイサービスに週2回通い、安定した生活を送っているという。

京都社会福祉士会の中川るみさん（67）は「罪を犯すことでしか、日常生活の支障を訴えられない人に、早期対応できるようになった」と効果を語っている。

■相当な効果ある

京都地検の矢本忠嗣次席検事の話 再犯防止に相当な効果があることが分かった。現場の検察官は面談以外でも社会福祉士と相談をしやすいになった。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

